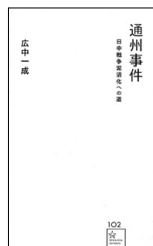


冷静な筆致で通州事件を見直す試み

広中一成著
通州事件

日中戦争泥沼化への道

大野 絢也



新書判 192頁
星海社／講談社発売
[本体880円＋税]

・本書が目指しているもの

本書は、星海社が発行し、講談社が発売する星海社新書として、二〇一六年一二月に刊行されたものである。著者の広中一成氏は、これまでもすでに『華中特務工作』秘蔵写真帖——陸軍曹長梶野渡の日中戦争（彩流社、二〇一一年）、『二七チャイナ 中国傀儡政権——満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京』（社会評論社、二〇一三年）、『日中和平工作の記録——今井武夫と汪兆銘・蒋介石』（彩流社、二〇一三年）、『語り継ぐ戦争——中国・シベリア・南方・本土』『東三河八人の証言』（えにし書房、二〇一四年）といった、数多くの書籍を執筆してきた。そして、本書は「通州事件の住民問題——日本居留民保護と中国人救済」軍事史学会編『日中戦争再論』（錦正社、二〇〇八年）および「報道写真からみた通州事件——日

中戦争初期における日本の反中プロパガンダ」朴美貞、長谷川怜編『日本帝国の表象——生成・記憶・継承』（えにし書房、二〇一六年）の如き、既発表の論考を土台にして加筆されたものである。

本書の主題である通州事件とは、日中戦争勃発の契機となった一九三七年七月の盧溝橋事件直後に、駐留日本軍部隊と特務機関・日本居留民が北京郊外の通州において、冀東防共自治政府（以下、冀東政権）の中国人部隊である保安隊によって「虐殺」された事件である。本書の冒頭でも触れられているように、この事件の評価をめぐっては一九八〇年代以降論争が起こった。特に、近年では反中世論の高まりのなかで、保守系論壇においてよく取り上げられるようになった。二〇一五年にはユネスコが「南京大虐殺文書」を世界記憶遺

産に登録した。そのことへの対抗策として、保守系団体である新しい歴史教科書をつくる会が通州事件の関係資料を世界記憶遺産へ登録申請することを発表したことは、記憶に新しい。著者も述べているように、日中戦争勃発から八〇年目を数える二〇一七年になったにもかかわらず、かような感情論に終始しているのは、何らよい結果を生み出さないことを評者も痛感している。

こうした一連の流れのなかで、著者は「なぜ通州事件で日本居留民が中国人に殺害されたことは十分に目を向けるのか。そのことだけにこだわっているようでは、この種の感情むき出しの『水掛け論』は永遠に終わらない」という問題意識から、客観的に史実を追うということを本書で目指している。そして「なぜそのような被害が出ってしまったのか、事件が当時の日中関係や日中戦争全体にどのような影響を及ぼしたのか」という幅広い視野から、「水掛け論」を終わらせるため、冷静に通州事件を捉えることが本書の目的となっている。

・本書の構成とその内容

本書は、「はじめに」「おわりに」のほか、全三章からなる本論で構成されており、コラムも二編添えられている。第一

章「通州事件前史」、第二章「通州事件の経過」、コラムその一「今に遺る通州事件の痕跡——『奥田重信君之碑』」、第三章「通州事件に残る疑問」、コラムその二「通州事件の歴史写真をめぐる」という構成になっている。読者は、第一章で通州事件当時の時代背景や事件の概要に触れてから、第二章、第三章と読み進めていくうちに、事件の詳細や、現代における歴史的評価の問題点について迫ることができるような展開になっている。

以下、各章の内容を取り上げてみる。第一章「通州事件前史」では、まず華北のなかにおける通州の成立と発展について現在の状況を交えながら位置付けをおこなない、そのうえで通州事件発生までの過程を日本の中国侵略と絡めながら論じている。そして、通州にあった冀東政権や日本軍の通州駐在、事件を起こした保安隊の設立の経緯を述べ、通州事件の背景を明解にまとめている。

第二章「通州事件の経過」では、この事件の実態がどのようなものであったのかという視点から、極めて詳細な事件の経過が明らかにされている。特に、事件発生時の通州における日本側の警備態勢、日本軍と保安隊との戦闘経過、保安隊に襲撃されたときの日本居留民の様子など、事件の展開が実証的な見地から記されている。そして、通州事件における事

前の計画性の有無や日本軍・冀東政権が抱えていた数々の問題、事件終結の背景などが改めて検証されている。また、第二章末尾に添えられたコラムその一「今に遺る通州事件の痕跡——『奥田重信君之碑』」では、現在の通州における事件由来の遺物を紹介している。

第三章「通州事件に残る疑問」では、既存の研究において未解明だった次のような問題を検討している。第一に「なぜ保安隊は反乱を起こしたのか」、第二に「通州事件によって新たに生じた問題はどのように解決されたのか」、第三に「通州事件で亡くなった日本居留民は通州で何をしていたのか」、第四に「通州事件は日中戦争にいかなる影響を与えたのか」の諸点である。また、第三章末尾に添えられたコラムその二「通州事件の歴史写真をめぐる」では、著者が名古屋の古書店において入手した通州事件に関連する写真資料を歴史認識問題との関連で紹介している。

以上のように本書では、通州事件の「関連資料を用いて実証的に考察し、通州事件の全容に迫る」という課題設定から多角的な検証が試みられているのである。

・本書の特徴

本書の最大の特徴は、通州事件発生の背景と経緯について、

詳細かつ丁寧な過程を追っている点である。特に、発生時の状況については、当時の新聞記事に載った経験談や回想録を用い、事件の展開を極めて生々しく描き出している。次に、通州事件という北京近郊の一地方都市で発生した日中間の事件が、いかに日中戦争へ影響を与えたのかという広範な視野から分析をおこなった点が挙げられる。そのなかでも、日中間の新聞を中心としたプロバガンダ戦から、日本国内の世論にいかん影響を与え、ひいては対中強硬論へと傾きはじめていたか、その経過をあぶり出そうとしている。

加えて、著者が実際に通州で撮影した写真や、古書店などで入手した写真片などを多数掲載した点も興味深い。特に、現代の通州における「奥田重信君之碑」の発見は、事件の実態を詳らかにしたいという著者の執念によるものといっても過言ではない。また、通州事件に関連すると思われる写真について事実を断定できる部分のみを示し、撮影日など真偽不明の箇所については安易な認識を控えるよう読者に訴えている点も特筆すべきである。これは保守系論壇においては恣意に任されがちな写真資料の使用に対して、警鐘を鳴らすものである。

最後に、通州事件について日中戦争研究史がなお残している課題を指摘したい。著者は「おわりに」において「八年に

わたる日中戦争を続けさせた戦争支持の日本国民の世論は、通州事件を境に揺るぎないものになった」と評価している。評者もそのような側面が存在していた点については同意する。しかし、同時期の抗日運動に関する報道を契機として、日本国民の世論が戦争支持へ傾いたという点では、通州事件だけではなく他にも多くの事例があったといえよう。例えば、通州事件より前段階の一九三六年において、萱生事件（上海）、成都事件（四川）、北海事件（広東）など、中国各地で抗日運動を背景とした日本人殺害事件が発生していた。当時の日本における主要新聞各紙は、一連の事件を「抗日テロ事件」として扱い、民間の日本人が中国各地で迫害されていることを強調して報道した。これらの中国の抗日運動を日本国内へどのように伝えていたのかという視点から、他の「反中プロパガンダ」の事例として、世論に与えた影響の経過を分析する必要があると考える。そして、通州事件の報道との共通点や差異を比較することによって、より通州事件の重要性や特徴が明瞭になるのではないだろうか。さらには、通州事件について華北だけでなく中国各地における抗日運動の展開とも関連させ解明できれば、通州事件を「日中戦争泥沼化への道」のなかに、より大きな枠組みから位置付けることも可能となるであろう。

とはいうものの、本書でおこなわれた多数の検証は多くの示唆に富んでいる。また、本書の筆致は、新書として的一般読者にも配慮されている面と、中国近現代史や日中戦争史の研究者に向けた議論も交えた専門性との両面を兼ね備えることが目指されたものである点も評価したい。本書を契機として、中国史と日本史の分野を問わず、日中戦争や通州事件に関連する研究が今後さらに進展することを、評者は期待している。

（おおの・じゅんや 一橋大学大学院博士後期課程）